

令和5年度

鹿児島県の教育

2・3月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副部長

鹿児島市立甲南中学校長
岩越悟志

夢を追うための決断

自分の目標に向かって、黙々と努力を積み重ねて、自分の足りない部分を高めていけば、いつかは、必ず誰かの目にとまります。それがチャンスというものであり、そして、人に認められた時に、努力の成果を実感することができるのだと思います。

しかし、必死に努力しても、緊張から目の前の壁を乗り越えられずに悔しい思いをすることはよくあります。また、どんな仕事でも、すぐに結果が出ないと不安にかられ、「自分はダメだと責めてしまう」こともあります。このように、過去の失敗をいつまでも悔やんだり、「いつかは、うまくできるだろう」と未来のことばかりを夢見たり、ほとんどの人の心は、過去と未来の間を絶えず往復する振り子のようなものだと思います。

令和五年九月十日、本校の体育大会が開催された日の南日本新聞に「甲子園へ四度目手術、痛みと闘う十五歳 夢を追い決断」という記事が掲載されました。野球を続けるために、四度目の手術を受ける決断をした中学三年生の話です。その生徒は生まれつき両足の先が内側にそれる病気を患っており、その治療のために足首の手術を、これまで何回もしてきたそうです。小学校時代は走ることもま

まならなかった彼は生まれつききのハンディを、努力でカバーし、「四番でエース」にまで成長しました。だが今年六月、歩けないほどの痛みが左膝を襲い、医者から「軟骨がすり減っているので、移植をしないとイケない。」と言われたのです。体育大会の学級対抗リレーで必死に走っていた彼を、後日、校長室に呼ぶと、彼は「何度も手術を受けていますが、手術を受けることには恐怖がありません。でも、『甲子園に立つ』という目標を達成するために、何事も必死に頑張ります。」と、強い口調で答えました。

人は、「何で自分だけが不幸なんだ」と愚痴を言っつて、なかなか動きだそうとしなかったり、目の前にある壁は決して高くないのに、自分で限界をつくってしまい断念したりするものです。まずは、自分をしっかりと見つめ、そして、目の前の壁が高ければ高いほど、覚悟を決めて、できることから一つ一つ行動に移していかなければならないのです。

過去と未来に多くの時間を割くのではなく、今をしっかりと生きることに時間を当てるのが、本当の幸せや喜びにつながるのだと、一人の生徒から教えられました。

令和6(2024)年 2・3月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	専門部だより	19
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



子ども食堂は地域みんなの居場所

特定非営利活動法人
かごしま子ども食堂支援センター

たくして 理事長

園田 愛美

「子ども食堂」とは、子どもたちに無料または低額で食事や団らんの場を提供する活動です。全国で七三〇か所以上、鹿児島県内でも

約一五〇か所の子ども食堂があります。地域の誰もが参加でき、地域の多世代交流や互いの見守りの場となっていることも食堂や、不登校の子どもが集い、家族以外の関わりをもてることも食堂もあり、その対象や目的、規模は多種多様です。

私は、二〇二一年度までの十九年間、小学校教諭として勤務しました。二校目の赴任地は三島村黒島片泊地区。二十五歳で初めて船に揺られてやって来て、三年暮らしました。

毎週日曜日の夕方、私は海風に吹かれながら坂の上にあるトヨさんの家を目指します。山の木々を背景に見える煙は、お姉さんを亡くし一人になったトヨさんが、私のために薪で炊いてくれているご飯の煙。夕焼けに反射する海のきらめきを頬に受けながらその煙の方へ歩きます。自分を気にかけて待っていてくれる人がい

る。白く細い煙を見上げながら、「明日からもこの島で頑張ろう。」と思いました。

トヨさんは自分の畑でとれたジャガイモやニンジン、鶏肉を入れて。トヨさんとちゃぶ台に向かい合い、よく味の染みだ煮物をほおぼって、私は心も体もじんわり温かく満たされました。

一緒に食べることで笑顔になり、元気が湧いてくる。そんな気持ちを誰もが感じられる場があるといい。私にも、教師として見てきた様々な家庭環境の教え子たちにも、地域のお年寄りにも、そこに暮らす誰にでも。それが、子ども食堂の活動を始めることになった原点です。

子ども食堂は「生きた学びの場」でもありません。親子や兄弟・同級生とは違う、縦でも横でもない「ななめの関係」が作れ、地域の伝統を食で学び、挨拶や食事の配膳でマナーを学びます。お手伝いを見つけて地域の人にほめてもらい、家ではしなかった経験をし、地域への愛着

略歴
二〇〇三年～二〇二二年 鹿児島県小学校教諭。
二〇一六年より「森の玉里子ども食堂」を開始。
二〇一八年より「かごしま子ども食堂・地域食堂ネットワーク」代表。
二〇二二年四月より、子ども食堂の周知と理解を広げる「特定非営利活動法人かごしま子ども食堂支援センターたくして」の理事長。

も育ちます。走り回ってしまいう子も、ケンカやわがままも当たり前にあります。

私が感慨深く思うのは、地域の中で流れる時間や空間の中で見せる子ども「個」の育ちに、地域の方が人によって様々に対処し、声をかけ、それに子どもが自分の育ちのペースで反応し、時間をかけて言葉や意思を表出できる関係を作っていく姿です。人と人が緩やかに呼応し、影響を受けて、みんなが場の創り手になっている。互恵的な「子ども食堂」が県内各地にあります。多様な人間関係の中で温かさや楽しさを感じ、生きることに主体的になり、自分が周囲に大切にされていると信じられる子どもが増えてほしいと思います。

地域の「人・もの・こと」を生かしたお近くの子ども食堂を訪ね、先生方も場の創り手になり、子どもや地域住民の姿に学び、そして、御自身のほっとできる居場所としていただけたら嬉しいです。



縦と横のつながりを強化する取組の充実

蒲生小(始伊) 才田 修

一 はじめに

二〇二二年度の問題行動・不登校調査の結果を文部科学省が公表した。全国の国公私立小中学校で三十日以上欠席した不登校の児童生徒は、十年連続増加の二十九万九千四十八人となり過去最高を更新した。さらに、この二年間は前年度からの増加幅が二割を超え、計約十万人の大幅増とのことである。不登校の理由としては、「無気力・不安」が過半数を占め、次いで「生活リズムの乱れ、遊び、非行」、「いじめを除く友人関係」が挙げられている。文部科学省は、「必ずしも学校に行く必要はないとの認識が広まったことなどが不登校増加の要因」と分析しているが、私自身は、新型コロナウイルス感染症の影響で児童生徒を取り巻く生活環境に数多くの制限が課され、対人関係が築きにくかったことが大きな要因ではないかと考えている。そこで、児童生徒が望ましい対人関係を築くにはどうすればよいのかを考えてみたい。

二 縦のつながりについて

新型コロナウイルス感染症が拡大している

時には、できるだけ接触する人数を減らす手立てが取られてきた。特に、高齢者等、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けることが予想される年齢層との交流が見送られた。また、学校の中でも、児童会(生徒会)活動といった異学年が交流する機会も減らされた。令和五年五月以降、新型コロナウイルス感染症が二類から五類に引き下げられ、交流の機会が増えてきた。しかし、基礎疾患のある高齢者等と交流するには、まだ、抵抗がある。

このことに対応するため、コロナ禍において急速に進んだICT等を活用してオンラインで交流することは可能であろう。また、小学校においては、幼稚園や保育園、こども園といった未就学の園児たちとの交流の機会も大切にしたい。さらに、児童会活動では、新入生を迎える会や卒業生を送る会等、全校児童が交流する集会活動を再度充実させた。そうすることで、異年齢集団での活動を通して、自己肯定感や自己有用感を育むことができるのではないかと考えている。

三 横のつながりについて

コロナ禍においては、児童生徒はマスクの着用を余儀なくされていた。コロナ禍以前では、当たり前のように行われていた相手の表情から相手の気持ちを察するという行いが、マスクが顔の大部分を覆うことで難しくなり、相手の嫌がる言葉を使っても気付かない児童生徒が増えてしまったのではないだろうか。やはり、児童生徒には、フェイストゥフェイスの活動が必要であると考える。各学校においては、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善が進められていることと思うが、児童生徒が面と向かって対話をする場面を大切にしたい。また、学級の諸問題について話し合い、解決を図る学級活動の充実も図っていきたい。学級の身近なところで起きている問題について、様々な立場で考え、解決を図る活動は、児童生徒の横のつながりを強化することに直結していると考えられるからである。

四 おわりに

児童生徒が望ましい対人関係を築くためには、コロナ禍以前に行っていた交流活動でできる限り復活させることが急務であると考えられる。その上で、コロナ禍で急速に進化したICT等を活用して業務改善を進めながら、児童生徒の交流活動を充実させたい。そうすることで、児童生徒の縦と横のつながりが強化され、児童生徒の望ましい人間関係が構築されていくものと考えている。



地域とともに歩む学校を目指して

高山中(隅) 有村 哲 郎

一 はじめに

本校は、今年度創立七十七年目を迎える肝付町立で八学級二百三十一名の規模校である。校長二校目として活気あふれる学校に期待と不安を抱えながら着任し、三年が経過しようとしている。コロナ禍での着任であり、恒例のあいさつ回りがなく地域の方等との連携が大きな課題であった。歴代PTA会長のつながりが強く、着任して間もなく顔合わせ会を開いていただき、地域の状況を御教授いただき大変心強かったと記憶している。

学校教育目標を「未来をひらく生徒の育成」と掲げ、重点目標を「時を守り 場を清め 礼を正す」「自己実現への挑戦」とし、日々の教育活動を進めている。かつて学校が荒廃していた時期を乗り越え、ようやく落ち着きを取り戻し、様々なことに挑戦できる体制が整い始めている。しかし、少子化の波には勝てず、学級減により職員減となったことで職員の負担が増えているが、職員間の風通しはよく、お互いの業務を助け合いながら生徒の指導や学校運営に積極的に参画している。

二 「時を守り 場を清め 礼を正す」学校

生徒に講話をする機会に、この言葉を使っている。私は人との信頼関係を築くために時

三 地域に信頼される学校

間厳守は絶対の条件だと考えている。以前は十数人いた遅刻者が、今年度は遅刻ゼロの日が続いている。また、掃除を一生懸命は当たり前のことだが、それに加えて掃除を通して様々なことに気づく人になって欲しいと話している。無言作業や作業前の黙想など清掃作業に積極的に取り組む生徒も多くなっている。礼を正すについては、心を込めた語先後礼を推奨している。立ち止まって一礼する生徒も増えてきている。全体的には、まだまだというのが本校職員の評価だが、地域の方々からは中学生がよくあいさつをすると好評である。大変うれしいうりである。

肝付町高山地区には、九百年続く高山流鏑馬があり、毎年十月第二日曜日に開催される。本校二年生の中から射手が選出されることが多いため、一年生に保存会から流鏑馬講話をしていただいたり、体育祭の昼休みに射手・後射手の披露を行ったりしている。

九月から練習が始まると、夕方、四十九所神社の参道に出かけ綱持ちボランティアとして全校生徒・職員が交代で参加をする。郷土への愛着を深めさせることができると考えている。週休日にも自ら参加する生徒も多くな

四 挑戦し続ける学校

り、効果が表れてきていると思う。また、地域の方々と触れ合う機会を持つことで、今の中学生の実態を知っていたくことができ、直接、褒めていただいたり、お電話で朗報をいただいたりするところがある。地域の方々に信頼していただけるよう今後も様々な形で地域行事に協力をしていきたいと考えている。

部活動が盛んであり、地区大会等で獲得した優勝旗が現在十本校長室に飾ってある。生徒に負けず教職員もバレー大会で優勝し、職員室に優勝旗を飾った。生徒には、先生たちも頑張っている姿を見せ、常に挑戦者であってほしいと願っている。そこで「チャレンジャー チャレンジ」の話を終業式講話にするようにしている。チャレンスを逃すな、掴んだチャンスにチャレンジすることで自分をチェンジすることができると話している。部活動だけではなく、地域イベントにも参加するなど様々なことに挑戦してくれるようになってきている。

五 おわりに

校長は、講話や学校だより等において発信する機会がある。同じことを伝え続けることで多くの人に理解してもらえらると思つていて。私が小学校時代の校長先生が講話の最後に「深く考え素直に学びましょう」とおっしゃっていたことを思い出す。また、地域の方々にも発信し続けることで御理解いただき、地域とともに歩んでいくことが可能になると考えている。



思いを受け継ぎ、伝えていく学校経営

面縄小(大) 石原 つぎ子

一 はじめに

本校区は、徳之島の伊仙町の南東に位置し、面縄港を中心に昔から開けた地区であった。面縄貝塚、琉球王朝時代の按司居城跡、豊見大親居城跡などの遺跡や「ドンドン節」「目手久八月踊り」「シヨンマイカ踊り」などの伝統芸能なども継承されており、豊かな歴史と文化がある。

学校教育目標は、「豊かな学力を身に付け、心豊かで、心身ともに健康でたくましい面縄つ子を育成する」である。地域に根ざした学校として、地域に支えられながら、教育目標の達成に向けて、教員ともに励んでいる。

二 学校経営の五つの重点プラン

学校教育目標に照らし合わせた目指す子供像の実現のために、「確かな学力育みプラン」「豊かな心育みプラン」「強いからだと健康育みプラン」の三つを、目指す学校像の実現のために「地域とともに歩む学校づくりプラン」「教師の指導力向上プラン」の二つを重点プランとして設定した。

三 取組の実際

(一) 確かな学力育みプラン

島で育つ子供たちの多くは、高校を卒業すると島から巣立っていく。巣立った先でうまく生きていくだけの力を付けてあげたいという思いが職員の中には大きい。そこで、全校体制で行う基礎的・基本的事項を確実に身に付けさせるためのチャレンジタイムの充実を図っている。また、夢や目標に向かって、一人一人が主体的に学習に取り組めるよう体験的な活動を積極的に取り入れたり、自分の考えをもち、適切に伝えることができる子供の育成を目指して授業においては、伝え合う場面を意図的に設定させるようにしている。

(二) 豊かな心育みプラン

相手の立場を理解したり、仲良く協力したりするなど、他者との望ましいかかわりがあるなど、進んであいさつしたり、適切な言葉遣いができたりするなど、礼儀正しくできる子供の育成を目指している。全職員で全児童を指導する意識をもち、「だれでも」「いつでも」「どこでも」共通指導

ができるよう徹底している。

(三) 強いからだと健康育みプラン

規則正しい生活習慣を身に付けさせることが子供たちの抱える問題点の多くにアプローチできると考え、学級PTA、学校保健委員会、学校だより、保健だより等で保護者に啓発を行ってきた。今後は、家庭教育学級でも一緒に考える機会をもちたいと考えている。

(四) 地域とともに歩む学校づくりプラン

保護者・地域に、学校の教育活動への理解を深めてもらうとともに、相互の連携、協力態勢の確立を図って、地域の自然や文化、産業、農業、人材等を生かした、特色ある教育活動を推進する。また、保・幼・小中の連携を密にした教育活動の充実を図っている。

(五) 教師の指導力向上プラン

職員一人一人が教職員としての自己の資質向上を目指すとともに、校内研修の充実を図り、チームとしても指導力の向上を目指している。積極的に互いの授業を参観したり、交換授業を行ったり、日常的に授業力の向上を目指す職員の姿が見られる。

四 おわりに

令和五年、奄美群島日本復帰七十周年を迎えた。本校は、その復帰運動の父と呼ばれる泉芳朗の母校である。泉芳朗について調べる度に教育に対する熱い思いに胸を打たれる。泉芳朗をはじめとする当時の教育者の思いを受け継いでいきたいと思う。そして、子供たちにもしっかりと伝えていきたい。



地域とともにある魅力ある学校づくり

蒲生高 岩川 透

一 はじめに

本校は、樹齢千五百年を誇る日本一の大楠がそびえ立つ始良市蒲生町に位置し、これまで一万五千人を超える卒業生を世に送り出した、今年で創立百十八年を迎える長い歴史を持つ伝統校である。普通科と情報処理科の二学科を有し、部活動や様々な学校行事、地域と連携した活動等へも積極的に取り組んでいる。部活動は約七割の生徒が入部しており、中でも硬式野球部、女子バレーボール部、ワープロ部は強化指定部として活動している。

二 経営方針

「明朗」「誠実」の校訓の下、「知・徳・体のバランスがとれ、困難に負けない精神力を持つて何事にもチャレンジし、未知の世界にあっても、豊かな想像力と社会性及び課題解決力によって他と協働しつつ地域社会に貢献できる人物」の育成を目指している。

学校スローガンは「元氣な挨拶と、ありがとうがたくさん飛び交う、明るく、楽しい学校」

生徒募集キャッチフレーズは「KAMOKO みんな いよいよ(一一八周年) 蒲生

(かもろ)へカモン!

三 本年度の重点

- (一) 募集定員確保(創立百二十周年行事を九学級で実施したい、普通科二学級維持)
- (二) 蒲生郷の物的資源、人的資源を生かした地域協働による学校づくりの推進(コンソーシアム蒲生の構築)

四 特色ある教育活動

今年には蒲生城築城・蒲生八幡神社建立九百年という節目の年である。地域に期待され、愛される学校を目指し、日本遺産「蒲生籠」プロジェクトをはじめ、たくさんの方に御支援をいただきながら、校外での体験的な学びを推進している。

一学期は、生徒・教職員と一緒に蒲生郷研修に参加し、現在様々なプロジェクトが進行中である。また、鹿児島市の「よかど鹿児島」での販売活動、帖佐駅でのボランティア清掃や



JR九州豪華寝台列車ななつ星のおもてなし活動、かごしま国体では本校生徒が商品開発した「kamoudラちゃん。」を入れる蒲生和紙を使った手提げ袋を生徒が作成し、おふるまい活動を実施した。基本コンセプトは「蒲生だからできる、蒲生しかできない活動を」である。



生徒が校外での体験活動を通して、地域の方々から「ありがとう」「がんばってるね」などといった言葉をかけていただくことによって、誰かに喜んでもらえる、役に立ったという実感を持つことにより、生徒の自己肯定感や学校への愛着心が高まると確信している。

五 おわりに

本年度は、「職員が元氣、生徒が元氣、PTAが元氣で、地域に元氣を与えられる学校」「雰囲気良く、地域から期待され、地域から愛される学校」を目指して、教職員・生徒一丸となって取り組んでいる。今後も学校と関係団体及び地域や企業などの協働による様々な体験活動やボランティア活動への積極的な参加などにより、卒業生や地域の方々から期待され愛される学校を目指して、中学生が行きたいと思う魅力ある学校づくりに尽力したい。



ウエルビーイングの概念を学校経営に生かす

大丸小(南) 遠矢美緒

一 はじめに

本校は、南九州市市川辺町南西部に位置し、東は南九州市知覧町、南は枕崎市、西は南さつま市に接している純農村地帯である。小規模校の本校に通う全ての子供たちが生き生きと成長していく姿を目指し「ウエルビーイング」の概念を学校経営に取り入れ、実践してきた取組を紹介する。

二 ウエルビーイングについて

近年、世界的に注目されているこの概念であるが、次期教育振興基本計画においてもその重要性が示されている。私自身改めて学習してみると、知れば知るほど自己肯定感が低く消極的な傾向にある本校の子供たちに必要であると強く感じた。今年度赴任した身ではあるが、機会を捉えてこの概念を子供たちや職員、そして保護者に伝え、学校経営に生かしていきたいと考えた。

三 取組の方法と実際

(一) 子供たちへの周知

子供たちへのこの概念の説明には、慶應義塾大学教授前野隆司氏提唱の四つの要素を活用した。楽しい幸せな毎日にするため

(二) 保護者への周知

全校朝会で子供たちに説明した内容は学校便りで保護者にも周知した。そして学校行事やPTA理事会など、機会あるごとに学校で目指している姿や子供たちの成長、家庭でできることなどを話した。ウエルビーイングに関連付けて話題にしたあいさつや登校時刻については、保護者の協力のお



ウエルビーイング説明画面
慶應義塾大学教授前野隆司氏提唱

に、この四つを実践しようと話した。子供たちの主体性を少しでも引き出したいと、校長が話をする際は、「みなさんが素敵な大人になるために役立ててください。」と、あくまでアド

(四) 主体的に考えて行動する力の育成

周りに言われる前に主体的に考え行動できる力を育成する絶好の機会が二期の大きな学校行事である。そこで、二期の始業式では「やってみよう」の項目から、主体的に考えて行動できることの楽しさややりがいなどを語った。その後は担任や全職員の協力の下、継続した指導を行った。二期の大きな行事である運動会や学習発表会後の子供たちの成長や子供たち自身の満足感は大変大きいものがあつた。

四 おわりに

子供たちの実態にできるだけ合った取組をしたいという思いで始めたことではあるが、赴任一年目ということで、計画的にウエルビーイングの概念を生かしているとは言えない。教育課程編成の時期にも差しかかっている。来年度は、教育課程にもこの概念を位置付け、子供たちの生き生きとした成長を全職員で支えていきたい。

(三) 職員への周知

陰でよい方向へ向かいつつある。
月に一回校長が話をしただけでは、子供たちはすぐに忘れてしまう。発達段階に応じてそれぞれの心に届けられるのはやはり担任である。そこで、職員朝会や職員会議では、ウエルビーイングの説明は勿論、日常的な指導方法や行事毎の成長へのサポートの方法などを語り、各学級での指導を依頼してきた。そして、成長が見られた場合は全職員で共有し、全員で子供たちに声掛けするようにした。



「やる気まっすぐしんけんげんき」な

山重っ子の育成

山重小(隅) 川崎 正

一 はじめに

本校は、学級数六学級(特別支援学級二学級含む)で、児童数四十八人の小規模校である。明治七年山重学校として開校し、本年度で創立百五十年を迎える。

本校では、標題にあるキャッチフレーズをより意識した「山重っ子四つの誓い」(やる気をもって、何事にもあきらめず、がんばります。まっすぐ、素直な気持ちを持ち、いじめは絶対許しません。真剣に取り組み、みんなと学び合い、高め合います。元気な心と体をつくり、夢や目標に向かって努力します。)が言える・わかる・できる姿を目指して次のような特色ある教育活動を進めている。

二 活動の概要

(一) 縦割り班活動

全校児童で、六つの縦割り班を編成し、活動している。主な活動内容は、清掃活動、花いっぱいタイムでの花苗の移植、全校遊びなどである。それぞれの活動で、五・六年生がリーダーとなり、下級生を支えながら取り組んでいる。五・六年生にとって、自ら下級生に頼られていると感じることが、自

己肯定感の向上へとつながり、下級生にとっては、五・六年生へのあこがれがキャリア教育につながると考える。

(二) 全校鼓笛活動

全校児童で、ドラムメジャーの六年生を中心に鼓笛隊を編成している。上級生が下級生に教えたり、仲良し音楽で隊形移動も含めた練習を繰り返したりしながら、運動会本番で発表している。本年度は四年ぶりに山重校区との合同開催。また、百五十年記念大会でもあり、参観者の感動を呼ぶ発表となった。地域の「ふるさと祭り山重」のオープニングでも発表する。

(三) 山重棒踊りの継承活動

郷土芸能の継承活動として、五・六年生が総合的な学習の時間に取り組んでいる。山重棒踊りの由来や歴史について調べ、実際に地域の棒踊り指導者から、所作を学ぶ。六尺棒を持った五・六年生が六人一組となり、練習を繰り返す。五年生が昨年度の経験者である六年生から学んだり、お互いに教え合ったりしながら、一つ一つの所作を深めていく。県民週間の学校行事「山重フ

(四) 消防クラブ活動

エスタ」で披露している。本年度は、創立百五十周年の記念式典で発表した。

消防クラブ活動
本校には、県内でも数少ない消防クラブがある。毎年度、三年生から六年生を対象にクラブ員を募集し、活動している。本年度は、十二人で活動している。曾於消防署員の御指導のもと、規律訓練や防火・防災に関する基礎知識を学んでいる。練習した成果は、市の出初め式で発表し、大変好評を得ている。

(五) 山重土曜体験広場活動

地域と連携した活動として、毎月第三土曜日の青少年育成の日を実施される「山重土曜体験広場」がある。農作業体験として、野菜作りや田植え、稲刈りがあり、その他に芸術鑑賞や凧作り・凧上げ等も行っている。地域の人とつながるための関係ができており、半数以上の希望する児童・保護者が参加して楽しんでいる。

三 おわりに

そのほかにも朝の体力づくり(ラン縄運動)やポランティア活動も本校の伝統である。特にポランティア活動は、登校した六年生が下級生を誘い、共に草取りや落ち葉掃きをして気持ちのよい朝を迎えられている。

今後も、未来を創る山重っ子が、やる気まっすぐしんけんげんきに自分の花を咲かせられるように、学校・家庭・地域と一体となった教育活動の推進に努めたい。



人は助け合いによって仲間となる

東桜島小(市) 濱 田 智 男

世の中が平成の大合併に向かって動き始めていた頃、とある小さな町で、派遣社会教育主事として勤務していた私は、当時仕えていた教育長先生が、職員向けに不定期で発行される指導資料を読むのが楽しみであった。それから二十数年の年月が流れたが、教育の話題だけでなく、偉人が残した言葉や季節の風物詩を巧みに織り交ぜながら、時には人としての在り方さえも説いてくださった。その言葉は、どこことなく教育長先生のお人柄も偲ばれて、いつしか仕事を進める上での大きな励みとなっていたことを覚えている。

学校に戻ってからも、仕事が行き詰まったり悩みを抱えたりしたときは、その資料を綴じ込んだファイルを引っ張り出してきて、解決の糸

口を探した。その中でも、異動を繰り返す度に読み返したのが、

「人は出会いによって知人となる。付き合いによって友人となる。助け合いによって仲間となる。」

という一文である。調べてみると、もともとは詩人、石川啄木が残した言葉に由来しているそうだ。

着任した先々には、たくさんの子どもや保護者、職員、そして、地域の方との出会いが待っている。それを単なる出会いで終わらせるのか、付き合いしていくのか、それとも助け合い、励まし合っていくのか。教育長先生には、教師としての大切な心構えを教えていただいたような気がする。初めて校長を拝命したときも、かなりのプレッシャーであったが、この言葉のおかげで、新しい出会いを楽しんでいけばきつと大丈夫、気負わず自分にできることを精一杯頑張っていこうと、気持ちを切り替えることができた。子どもたちも、長い人生の旅路の中で様々な出会いを体験するであろう。よい出会いに恵まれて、豊かな人生を送ってほしいと、願わずにはいられない。



私たちは

ここで生きていけないといけない。

伊作田小(旦) 糸 井 義 行

教師駆け出しの頃、ある保護者の方から言われた言葉である。「先生はいいよなあ。転勤があるからいずれここを離れていく。でも私たちはここでずっと生きていかなければいけない。」そんなことを言われた。初任二年目、初めての学級担任を任せられ、意気揚々と担任ができる喜びを味わっていた。しかし、夏休み終了を機に様々な問題行動が噴出した。生徒間暴力・授業妨害・喫煙・エスケープ等々、毎日のように生徒指導で駆け回り回った。無我夢中、疲労困憊であった。なぜそうなってしまったのか、私の何がいけなかったのか、大いに悩み苦しんだ。逃げたくなかったことも何度もあった。そんな私の弱い心をその保護者の方は見透かしていたのかもしれない。

私たち教師には、転勤がある。数年後にはその勤務先から次の勤務先へと異動していく。私もこれまで様々な勤務地で子どもたちや保護者の方・地域の方々との貴重な出会いがあった。もちろん、楽しいことばかりではない。逃げ出したくなるような困難なことも数多くあり、つい後ろ向きな考えや発言をしてしまうことがあった。そんな時、この言葉がなぜかいつも頭に

浮かぶのである。「私たちはここで生きていかないといけない」。と。

当時、保護者の方や先輩教師から、親の子どもに対する「覚悟」や「生き方」、生徒との向き合い方を数多く学んだような気がする。親は我が子から逃げることはできない。もちろん私たち教師でもあるが・・・。今では、この言葉は、自分の弱き心の戒めの言葉となっている。

卒業式を終えた後の保護者の方々との酒席で「先生、この一年大変だったね。俺たちも大変だった。迷惑を掛けた。でも長い教師生活の中で貴重な体験をしたね。これからも頑張つてね。ありがとう。」戒めの言葉、応援の言葉を掛けてくださった方のためにも今、そして、これからも頑張つていきたい。

人生を楽しむひとこと

高岡小(隅) 井上 智 司

「僕たちはお金をもらって、この広い鹿児島県内を旅行させてもらっているようなものだよなあ。」

これは、初任校の職員室でのことです。大学を卒業し、屋久島の小学校で教諭として赴任した私に、ニコニコと笑顔でおっしゃった教頭先生の一言でした。十か所異動してきた今、本当

にそのとおりでなあと実感しています。赴任したそれぞれの場所に学校・職場があり、地域に住む方々がいらつしやる。夜は語り合いの場があり、時にはその土地の焼酎が出され、その土地の名物に舌鼓を打つものでありました。

また、夏季休業中ともなると、鹿児島市にいる両親や関東にいる弟妹が赴任地の指宿や種子島に遊びに来ることがあり、とても喜んでもらえたこともありました。

異動のよさはこれだけではありません。その地を離れた後も、つながりが残ります。連絡を取り合ったり、時には贈り物をし合ったりすることがあります。その土地のよさを思い返し、また今日一日頑張つていこうという活力になります。

「仕事と家庭の二本足で立つと不安定である。しかし、そこに趣味というもう一本の足があれば安定するものだよ。」

これは、派遣社会教育主事として勤務していた頃、懇親会の席で当時の所長がおっしゃった一言です。私自身まだ三十歳の頃でした。

その頃の社会教育の現場で出逢う地域の方は、皆思いやりにあふれる素敵な方ばかりでした。年齢を重ねてなお、趣味に生きがいを感じられていました。そして、仲間との交流を図り、生涯学習大会においては、それまでの学習の成果をイキイキと発表されてきました。

なるほど、趣味というものは自分自身の人生を楽しむためにとても大切であり、それが人と

人とのつながりをつくるものなのだなと思いましたが。

定年引上げに伴い、さらに異動の機会が増えます。今後もその地のよさを体得し、趣味の世界を広げ、よりよい人生を歩んでいきたいです。

試練は乗り越えられる人にしか

与えられない

早町小(大) 長 田 正 浩

教職生活三十六年目が間もなく終わろうとしている。

初任校は離島で、全校児童百五十人程の小規模校だった。三年間勤務させていただいたが、初任から任された校務は、三年連続体育主任だった。担当学年は五年、五年、六年の希望していない高学年ばかりだった。また、前年度県大会で二位になったという女子バレーボール少年団の監督も任された。初任者で、バレーボール未経験の私にとって、教員としての厳しさを学んだ三年間だった。

次に再配で異動した学校は、全校児童五百人余りの中規模校で、最初の四年間は、六年、五年、五年、六年と、またまた高学年ばかりの担任を任された。校務も、体育主任や儀式的行事

係など、教務の仕事も一部任されるようになった。さらに、学生時代に柔道をしていたこともあり、柔道スポーツ少年団の監督も任され、週休日の柔道大会に、児童を引率することも多かった。

今、振り返ってみると、とてもハードな日々を過ごしていたと思う。自分ばかりが、きつい校務をさせられている感があり、時には管理職に不信感を抱くこともあった。

そんなとき、同学年部の先輩の先生が「長田くん、『試練は乗り越えられる人にしか与えられない』という言葉があるんだよ。今は、きついと思っているかもしれないけど、きつとこの経験が生きるから、『頑張る』と声をかけてくださった。

それからというものがきついと思うたびに、必ずこの言葉が私を励まし支えてくれた。

研究公開時に研修係の代理を務めたときもそうであった。教務主任として教頭先生不在の二か月を乗り切ったときもそうであった。管理職（教頭）になり、同年度に五つの事務局等を担当したときには、さすがにとてもきつかったが、その言葉が私を励まし支えてくれた。

そして、今に至る。これからも先輩に感謝するとともに、感謝される先輩を目指したい。



ある日の校長講話



『キャリア教育』

(キャリア教育講演会でのあいさつ)

星原小(熊)井 口 俊 二

(略)

『キャリア教育』って言われても、みなさんは、なかなかピンとこないかもしれませんね。国語や算数のように教科書はありませんし、時間割にも出てきませんから、「キャリアって何だろう。」と知っている人もいます。

校長先生は、『キャリア教育』というのは、「将来、自分がなりたいもの、やりたいことを見つけて、それを実現するために必要な力を蓄えていくこと」と考えています。

みなさんは、毎日学校で多くのことを学んで

います。国語では漢字を覚えたり、物語や説明文の読み取りをしたりしています。算数ではいろいろな計算の仕方を学びます。理科では自然や科学の不思議について学習しています。道徳やいろいろな行事・体験活動を通して、心の勉強もしています。他にもあいさつや返事、整理整頓、靴を揃える、係や委員会の仕事、学校のきまりを守るなど、実は学校でやっていることはすべて、『キャリア教育』なのです。みなさんは、毎日少しずつ、「将来の夢や希望を叶えるための力」、「なりたい自分になるための力」を蓄えています。

今日は、講師の先生をお迎えしています。先生のお話を聞く中でいろいろなと感じたり、考えたりすることがきつとあると思います。しっかりと話を聞いて、自分の将来の夢や目標について考える機会にしてほしいと思います。

保護者の皆様、本日はお忙しい中、講演会への御出席ありがとうございます。今夜は、ぜひ、この講演会のことを話題にしてください、お子さんと将来の夢やこれからがんばっていききたいことなど語り合ってくださいと、今回の講演会のねらいが十分達成できますので、よろしくお願いたします。

それでは講師の先生を御紹介いたします。

(略)

〇〇先生、限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願いたします。

「自分で早起き」

「不思議な力をはたらかせて」

松元小(市) 雪 丸 堅

これは、秋の訪れとともに姿を現すヒガンバナという花です。名前の由来は、秋の彼岸の頃に咲くことからきています。彼岸とは、春と秋に訪れるお彼岸の中日を中心とした一週間を指します。

私は、このヒガンバナがどうやって毎年秋が来たことを知るのかなと不思議に思っています。土の中で根つかがカレンジャーをペラペラめくっているのでしょうか。それとも、土の真ん中で「秋が来ましたよ」とお日様からお手紙が届けられるのでしょうか。何か不思議な力をはたらかせているように思います。

不思議な力と言えば、二年生の国語で「たんぽぽのちえ」を学習しますね。タンポポは、種子を太らせるために花と軸を横たわらせて休ませ栄養を送ったり、綿毛のらっかさんが飛びやすいうように、よく晴れて風のある日を選んで綿毛のらっかさんを広げたりと、これまた、不思議な力(ちえ)をはたらかせて仲間を増やして

います。

さて、私たちにも、ヒガンバナやタンポポと同じように、不思議な力(ちえ)があるのでしょうか。

私は、私たちにも不思議な力(ちえ)があると考えています。いつも皆さんに話している「自分で早起き」も、その一つだと思っております。

なんと、不思議なことに私たちの体の中には「時計」があるのです。自分で早起きしてお日様の光を浴びると、その時計が動き出します。

そして、「さあ、一日が始まるよ」と体中に合図が送られて、力がむくむくと湧き出てくるのです。そして、その湧き出る力が「今日もがんばるぞ、やればできるぞ」とやる気と自信をもたせて、一日を元気に始められるようにしてくれます。

ヒガンバナやタンポポをはじめ、自然の中のたくさんさんの生きものが、不思議な力(ちえ)をはたらかせて生き生きと生長しています。

さあ、皆さん、私たちも、「自分で早起き」の不思議な力(ちえ)をはたらかせて、「昨日の自分を越える今日に、今日の自分を越える明日に」と、一日一日を生き生きと過ごし、成長していきましょう。

自分の将来の職業について考えよう

「職業を選ぶときのポイントは」

里中(北) 柿 元 真 一

進路を考えると、自分がどんな仕事をするかというのは一生に関わることであり、慎重に判断すべきです。職業を選ぶときに考えておくべきことはどんなことでしょうか。たくさんある中のいくつかを挙げてみます。

一 その仕事をして、自分は幸せか

自分がその仕事を好きでなければ、こんなに楽しくない人生はないでしょう。仕事が好きなくてもやっていけるのは、自分がその仕事が好きで、その仕事に誇りをもてるからです。やるからには自分が納得でき、好きな仕事をしたいです。ただし、仕事をして楽しいことばかりではありません。どこかで苦しいこと、つらいことにぶち当たることもあると思います。その時「自分はこの仕事ができなくて、苦しいこともあるけど幸せだ!」という気持ちで困難を乗り越えられるようであればいいですね。

二 その仕事で満足できる収入が得られるか

いくら好きな仕事であっても、収入が少なく生活が苦しいようであれば、その仕事を長く続けることができません。その仕事を続けるためにまた別にアルバイトをするようなことになるのであれば、せっかくの仕事もつらいものになってしまいます。その仕事で自分が満足できる収入になるかを考えましょう。

三 自分がその仕事をする事で、社会にどんな貢献ができるか

仕事をすることで他の人の役に立つということが満足や喜びになります。自分がどんな仕事で社会に関わり、貢献できるかを想像してみましよう。それによって自分が満足し、さらに、自分が成長できる仕事を選びましよう。

これから先、高校で学んだり、今まで気付かなかった職業に出会ったりして、考えが変わってくることもあります。家族や身近な人たちに自分の考えや思いを相談してみても、アドバイスをもらいながら考えを深めてみましょう。

話のひろば



「講話」探しの中で

考えたこと

鶴荘学園(北)

橋野正毅

今年の四月に校長を拝命し、何もかもが初めてで、慌ただしく、悩み・学びながら日々邁進している。

期課程生は暇そうな顔をする。ちょうどいい塩梅の講話に苦慮している。

そんな中、興味をもてる講話のために、新聞や雑誌、TV、インターネット、SNS等を注視するようになった。とあるSNSで次のような内容のイチロー氏のインタビューがあった。「人の悪口をその人の前で言えないなら、僕は悪口は言って欲しくない。その人の前でも言えるなら、悪口を言ってもいい。でも、本人の前で言えないなら、僕は言わないってルールがある。『言っちゃおうと思います。』はOKで、さらにいいと思います。百点です。」これを見ながら私は、大学の恩師の「私は人の悪口は言わない。悪口は必ず相手に伝わり、人間関係が悪くなる。人の悪いところではなく、良いところを探すと、人間関係は豊かになる。」という話を思い出した。

イチロー独特の言い回しと、大学教授の話は、「悪口を言わない。」が共通する。これは簡単なので難しく、いじめにも通じる。悪意無く、悪口を言っていないつもりでも、悪口を聞いた人は悪意が伝播し、言われた人を悪い人だと感じる。そして、悪口を言われた人は、弁明するチャンスも与えられずに、追い詰められていく。

いじめも悪意が伝播し、距離感が生まれ、本人はいじめているつもりは無くとも人を傷つけていく。その負の連鎖が起きることを認識し、脱却し、良好な人間関係を築くためにも、悪口を言わず、人の悪いところを直接助言として伝えることができ、人の良いところ探しができる、そんな児童生徒を育て、見本として後ろ姿を見せられる校長でありたいと思う。

野鳥に魅せられて

福山小(始伊)

平田 賢 司

国分広瀬地区の国

道十号線南側には広

大な田園地帯「小村

新田」がある。これ

は幕末の薩摩藩家老

調所広郷の命により、岩永三五郎らの干拓事業でできた新田。新田と海に面する堤防沿いには、流入する海水を調整するための調整池（潮だまり）が設けられている。稲穂がたわなに実り収穫を迎える十月中旬、住吉調整池から天降川河口域にかけて、シベリアやアラスカで繁殖し越冬するため南下する多くのシギ類を観察することができ。さらに、この地を中継地として、赤道をまたぎオーストラリアまで移動する種もいる。その移動距離は実に一万km！チドリ目の

「トウネン」は、わずかに二週間ほどの休息を経て、目的地へと旅立つ。体長一五cmほどのスズメ大、そのパワーに驚く。

昨年度までの奄美大島在住の二年間、豊かな自然、とりわけ多種多様な動植物に魅了され、野鳥観察とその撮影に夢中になった。本校に赴任してからも天気の良い週末は、えびの高原や高千穂河原に出かけている。シジユウカラやヤマガラ、ソウシチヨウなどの留鳥に加え、夏場はオオルリやキビタキ、冬場はオオジュリンやジョウビタキなど、霧島山系は一年を通して野鳥で賑わう。森に分け入り深呼吸をする。落ち葉を踏みしめながら、かすかな囁きに耳を傾ける。わずかなちらつきを注視しながら動きを追う。ファインダー越しにチャンスをつかおう。今だ！静寂の中にシャッター音が響く。野鳥との出会いにより、私の週末の過ごし方は一変した。



Today Birds, Tomorrow Humans 「今日、鳥たちに起こる不幸は、明日、私たちの身に降りかかるかもしれない。そして今日、鳥たちに起こる幸福は、明日の私たちを幸せにするかもしれない」という意味をもつ。野鳥の生息は自然

環境の良さを示すバロメーター。環境教育を考えると、まずは、身近な自然環境や生活環境に目を向けさせたい。そして、美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知のものに触れたときの感激を大切にさせたい。

教育の本質とは…

朝日中(大)

山 宗 功

自分が初任者だった頃の話であるので、およそ三十年近く昔の話である。

初任一年目の四月に、教頭先生から「窓閉めを手伝ってくれないか」と声をかけられた。教頭先生は、一緒に窓を閉めながら、「山さん、この学級とこの学級の違いがわかるか」という問いを二つの教室の間に立ち、私に投げかけた。

違いは明白だった。一方の学級は机が整然と並び、黒板もしっかりと消され、溝にはチョークの粉一つなかった。一方の教室は、その逆。机の並びは乱雑で、黒板には授業の板書が残り、鞆棚にはくしゃくしゃになったプリントが残されていた。「この学級はいろいろな問題が起ころよ。見ててごらん。」教頭先生が言われたとおり、後者の学級では、様々な生徒指導上

の問題が起こり、担任もその対応に追われていた。

初任一年目の四月にこのことを学ばせてもらったことは、教師生活を長く続けていく上で、とてもありがたかった。担任をした学級では、帰りの会で机を並べさせ、日直と会話しながら教室を整頓してから学級を離れることを日常とした。授業学級でも授業前に机を並べさせ、消し後が残らないぐらいまで黒板をきれいにしてから授業を始めた。だからといって学級が荒れなかったかと言われれば、教師を続けるかどうか悩むほど困難な生徒指導も経験したし、学級経営に頭を悩ませたこともある。生徒に教科の力が確実に付いたかと問われると自信をもってそうだとはいえない。ただ、自分の中でルーティーンとしていることをしなければ、更に悪い方向に物事が進んでいくような気がしたのと、初任者の頃からずっと続けているという「こだわり」が、自分を動かしていたように思う。

協働的な学び・個別最適な学び、一人一台端末など教育の潮流は私が初任者の頃とは大きく異なってきた。手書き・ワープロでスタートした世代の私は、正直ついていくのがやっとである。現代の教育方法は確かに素晴らしいが、教育の本質はもともと違うところにあるのではないかと感じているのは私だけだろうか。

読書案内



■野中根太郎 著

吉田松陰の名言100

与路小中(大) 川井 功 作

十月、燃ゆる感動がごしま国体観戦に伴い、大学のOB・OG会が開催された。当時の監督や全国から先輩・後輩が来鹿し、思い出話に花が咲き、お酒のペースもついつい上がってしまった。昔と変わらず、監督や先輩との会話では自然と直立不動になり、背筋がピシッと伸びるのを感じた。

大学在学当時、最寄り駅は「松陰神社前」、大学寮名は「松陰寮」。寮では随分と鍛えられたものだ。寮の前の公園横に「松陰神社」が建立されており、歴史があり由緒ある場所、在

学中は度々参拝に出かけたものだ。大学入学前は、吉田松陰については、社会科で学習するくらいで、幕末に活躍した一武士であるという認識しかなかったが、彼の人物像を知るといづれ、その生き方に引かれ、憧れを抱くようになってきたことを覚えている。また、教員を目指そうと思った原点もそこにあつたように感じる。

本書では日本人の在り方について、一つの理想、日本人の目指す生き方をまっすぐに説き、それを実践したその魂の言葉が綴られている。「志・誠・学・行・勇・智・友・生・魂」の九章からなる。わずか三十年という短い生涯ながら、数々の大事業を成し遂げた。

松陰には、私情はほとんどなく、あるのは誠であり、仁であり、人と国を想う心であった。ひとたび松陰に接し、松陰の話を聞く人は、ほとんどその至誠人の説くことに涙を流し、自分を変えようとした。社会、国を変えなければならないとした。そして、事実そうだった。

本書は、吉田松陰の数多くの教え、言葉の中から名言を集めたもので、ほぼ松陰の教えの核心が分かると思う。繰り返し読むたびに、勇気をもらい、前向きになれる。自分を変え、人を変え、組織を変え、そして、成長させていくヒント、言葉が綴られている一冊である。

アイバス出版 一五〇〇円

■野村克也 著

野村メモ

山崎小(北) 柳野 竜 生

著者は、テスト生として南海ホークスに入団し、球界を代表とする捕手として活躍した。三冠王一回、MVP五回、本塁打王九回、打点王七回、首位打者一回、ベストナイン十九回と、輝かしい成績を残した。監督としても、南海ホークスで一回、ヤクルトスワローズで四回、リーグ優勝した。

なぜ、テスト生として入団した著者が、そこまで輝かしい成績を残せたのか、大変興味がある。

他の人より練習し、努力していたのは当然だと思うが、他の人と明らかに違うものとしては、メモを取るといふことだ。一晚経つと、前の日にあった細かいことのほとんどは、忘れてしまふ。なので、その日のうちに必ずメモするようになった。しばらく経つてからメモを読み返すことで、改めて気付くこと、反省することが出てくるから、メモは学びの宝庫と言える。また、仕事の効率を上げたり、自分の技術を高めたりして、人としての成長を促してくれる。メモしたことを読み返しながら、自分の中でしっかりと消化できる人が成功する、とある。

さらに、講演に備えて、メモしてきた心に響く名言が、人間の幅を広げる。常日頃から「○とは？」と問題意識をもって考え、自分なりの答えをメモし続けることが重要。失敗の理由を探し、突き詰めて考えることで、成功への道

筋が見えてくる。悔しいこと、恥ずかしいことを「忘れてはならないこと」として、しっかりとメモし、失敗を成長の糧にする。人は失敗を重ねることで、精神的な強さを獲得し、成長していくなど、メモの効果について述べている。

後半には、リーダーは、いかに人材を育てたかによって、その価値が測られる。部下のやる気を引き出し、自発的に仕事をしてもらうのが一番など、リーダー論も述べている。

どのようにして過ごしていけばよいか、示唆を与えてくれる本である。

日本実業出版社 一四〇〇円

■山 悦子 著

与論島の山さん

北指宿中(南) 有村 宏 史

二十代の頃、再配で与論島に勤務していたこともあり、題目が気になりこの本を手にした。ページをめくってみると、透明度の高い海に映える干潮時にだけ現れる白い砂浜「百合ヶ浜」の写真が、目に飛び込んできた。三十年程前に住んでいた時の光景を思い出し、懐かしく感じた。

この本は、奄美群島最南端に位置する与論島に生まれ暮らす、薬草研究家・山悦子さんの「薬草に捧げた人生と幸せな終末へのメッセージ」で構成されている。

山さんは、三十歳で脳腫瘍を患い余命宣告を

受けた時、偶然見かけた本の「脳腫瘍にミツバを摂るといい」という記述にすがり、ミツバや島の薬草を摂り続け、約二年で突如、痛みや腫瘍が消えたという。この経験から薬草研究を深め、理学療法士として医療現場にも携わり、薬草の継承と島民の健康の役に立ちたいという信念を貫き、約三十年の成果として、六十五歳で「与論島薬草一覽」を完成させた。また、二〇〇七年には「薬草・薬膳カイロプラティック健康研究所」を設立し、多い時には、年間三〇〇人が山さんのもとへ健康相談に訪れるという。

また、後半は「私の大好きな与論を皆さんにも好きになっていただきたいので…」と、与論島のことについて語られている。感謝を示す風習や人・自然を尊ぶ心など「与論島や島民には特別なものがある」という。「トートウガナシ(尊加那志)」という島の方言も紹介されているが、これは与論島を訪れたことがある人は、一度は耳にしたことがあると思う。与論島では日常的に使われている言葉で、「ありがとう」という意味だが、島民が受け継いできた「尊い方を敬って感謝する。」という相手に敬意を示す表現だという。

そして、山さんは「自分が今存在しているのは出会った人々や自分の命を助けてくれた島の自然を含めた万物のおかげだ。」と、思うようになって、その全てに深く感謝するようになったという。山さんの語りを通して改めて、身の回りの物事に感謝し「足るを知る」ことが、生きる喜びや他者への思いやりにつながることを気付かせてくれる、心を揺さぶられる一冊である。

角川書店 一五〇〇円＋税

「あなたの趣味は何ですか？」この問いに対して私は、「これだと言える趣味は特にありません。」と答えるだろう。強いて挙げれば、「魚釣り、もしくは食べ歩き」と答えるかもしれない。

昭和六十三年四月、新規採用教員として、阿久根市立の中学校に勤務することになった。新採の私は、ある先輩の先生に連れられ、よく釣りに出掛けた。黒之浜漁港から遊漁船に乗り、平瀬という瀬にのり、チヌやタイなどよく釣ったものである。二校目は、旧根占町立の中学校に赴任した。ここでも、先輩の先生に誘われ、遊漁船に乗り錦江湾でのタイ釣りにはまった。それから、しばらく釣りをする機会もなく、釣り竿も棚の奥にしまったまま年月が過ぎた。

平成二十一年の四月に、一回目の奄美大島に赴任した。美しい山の緑、海の青、自然と伝統芸能に心癒される美しい島だった。そこで、心癒されつつ、釣りを再開することになる。よく行った場所は、宇検村の部連である。小さな桟橋から竿を振り、糸を垂らし、エラブチと呼ばれる魚をよく釣るとともに、美しい自然に囲まれ、時間を忘れ暗くなるまでウキを見つめていた。本当に心落ち着き、癒されたことであつた。それから、またしばらくは、釣り竿が眠ることになった。

奄美大島を出て八年が過ぎ、再び釣りをする機会を得た。二回目の奄美大島勤務である。またあの美しい自然に囲まれた癒しの島に行け

趣味・文芸



心癒される島、奄美大島

西紫原中(市) 松本 遵

るのかという気持ちの中で、古びた釣り竿は忘れずに、車に積み込んだ。

しかし、釣りをしたのは、一、二、三回程度で、二回目の奄美大島では、「食べ歩き」にはまっていた。「食べ歩き」と言うより「食堂・レストランめぐり」である。

奄美大島は、食の宝庫でもある。

鶏飯、油そうめん、トビンニヤ、塩豚に島豆腐、きびす、黒糖菓子、かしや餅、黒糖焼酎など様々である。これらの料理を提供する食堂やレストランも多かった。土日となれば、よく食べに出掛けた。奄美市(笠利、名瀬、住用地区)、龍郷町、大和村、宇検村、瀬戸内町、加計呂麻

ランチを済ませたら、諸鈍にある○○○カフェにも立ち寄りたい。

諸鈍と言えば、伝統芸能の諸鈍シバヤも一度は見たいものである。

諸鈍シバヤは源平の戦いに敗れて落ちのびて来た平資盛(たいらのすけもり)一行が、土地の人々との交流を深めるために伝えたのが始まりと伝承されている。手製のカビデイヤというお面と陣笠風の笠をかぶって囃子と三味線の伴奏に乗って演じられる。演じるのは全て男性で、主に旧暦の九月九日に諸鈍大屯(おおちよん)集落にある大屯神社で行われる。

諸鈍シバヤの独特の演奏は、今でも耳の奥に残っており、懐かしいリズムだ。

諸鈍の春は、デイゴの朱色の花で覆われる。デイゴ並木は美しい。五月から六月にかけて、デイゴの花に囲まれて、真っ青な海を見るのも心が癒される。

奄美大島は伝統芸能も多く伝承されているとともに自然も豊かに残っている。緑の美しい山々には、ヒカゲヘゴやオオタニワタリが生い茂り、アカシヨウビンやルリカケスの鳴き声も聞こえてくる。夜になると、リュウキュウコノハズクの鳴き声が、神秘的な夜の山に響きわたる。

奄美大島での「魚釣りや食べ歩き」を中心に書き綴ってきた。これが趣味ということではないか?とも思ってきた。奄美に興味のある方はぜひ、いろいろと調べてみてください。○に入る名前は、すぐに分かると思います。



地域に根ざした教育活動の実践

神川小(隅) 久留和秀

一 はじめに

錦江町は、大隅半島の南西部に位置し、錦江湾に面した自然と歴史が調和した魅力的な町である。二〇〇五年三月二十二日、旧大根占町と旧田代町との合併により誕生し、現在は人口六五〇〇人弱の小さな町である。

本校区は、町北部に位置し、垂水・鹿屋方面からの玄関口にあたる。学校から町の中心部までは約四kmの距離で、交通の便も良い。海あり山あり川ありで自然環境に恵まれており、校区の中央を流れる神ノ川には県指定天然記念物のカワゴロモが自生している。

創立百四十七周年を迎えた本校だが、令和五年度の児童数は三十四人で、小規模校である。校訓「つよく かしく やさしい子」、キャッチフレーズ「あいさついっぱい 花いっぱい やさしさいっぱい 神川小」を掲げ、地域の方々に見守られながら日々の教育活動を推進している。

二 伝統芸能『銭太鼓』の継承活動

約二百年前から、本校区鳥浜地区の諏訪神社秋祭りに、翌年の豊作を祈願し踊り続けられてきた伝統芸能『銭太鼓』を本校では伝承している。銭太鼓は装飾された長さ三十cmの竹筒の中に小銭(硬貨)を入れ、この竹筒二

本を持って、三味線や太鼓に合わせて座って踊るのが基本である。以前は錦江町文化協会の方が、本校五・六年生に指導及び伝承をされていたが、指導者の高齢化や昨今の感染症対策の関係で指導にまわれない場合が多くなったため、上学年から下学年に児童同士で教え合う形で伝承するようになっている。今年度も、県民週間期間に実施した学習発表会の演目として、保護者や地域住民に披露し、多くの拍手をいただいた。



三 風光明媚な「神川大滝」・「神川海岸」

垂水市方面から、本土最南端の「佐多岬」に向かう国道二六九号線を南下し錦江町に入ると、「神川海岸(ビーチ)」が見えてくる。この神川海岸は、ここ数年のキャンプブームやインスタ映えすることでも有名になり、訪れる人が多くなった。目の前には錦江湾が広がり、その奥に薩摩半島、右手に遠く桜島、左手に薩摩富士「開聞岳」を見渡せる風光明媚な海岸である。遮るものがないために夕日スポットでもある。さらに、「影絵の祭典」と名付けられた影絵アート作品が数多く展示されており、晴れた日の夕方には美しいシルエットとなり、幻想的な雰囲気醸し出している。

学校の近くには神ノ川が流れ、その上流に進むと神川大滝公園に行き着く。公園近隣には七つの滝が存在する。神ノ川には、古くからの言い伝えである、七福神が洪水を鎮める

という「七滝伝説」がある。七滝とは、「大滝(恵比寿)」「小滝(弁財天)」「雨後の滝(毘沙門天)」「長次郎の滝(福祿寿)」「小便の滝(大黒天)」「松尾の滝(布袋尊)」「桂巻の滝(寿老人)」であるが、全ての滝が整備されていないのは残念である。

神川大滝公園内の幅三十m、高さ二十五mの神川大滝は、ダイナミックに流れ落ちる瀑布が迫力あり、周囲にはマイナスイオンが溢れ、癒やしの空間にもなっている。

四 郷土の景観を守り生かした教育活動

本校では、令和元年度から三か年、鹿児島県総合政策部地域政策課が進める「かごしま景観学習」に取り組み、今も校区の海・川・山を守る活動を総合的な学習の時間を中心に行っている。併せて、SDGsの重点項目として、「十一 住み続けられるまちづくりを」、「十四 海の豊かさを守ろう」、「十五 陸の豊かさを守ろう」を挙げ、ボランティア活動として校区内の神川大滝公園内の清掃や神川海岸の清掃等を行っている。また、「自分たちの手で錦江町をPRしたい」という児童の発想から、神川海岸の影絵アート作品作りにも取り組んできた。



五 おわりに

神川の素晴らしい自然・歴史・人等の素材を活用し、地域に根ざした郷土教育活動を行うことで、郷土を愛し誇りに思う子供の育成ができると思ひ、今日も教育に携わっている。

専門部だより

〔総務部〕

一 各地区校長会との連携

各地区校長会との連絡会は、鹿児島市、鹿児島郡、日置、北薩、始良・伊佐、大隅、熊毛の七地区で開催できた。

連絡会では、学校における働き方改革、中学校の部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方、定年引上げ・役職定年制などについて意見交換がなされた。今後は県教委からの情報共有に努め、学校間連携を更に図ることを確認した。

二 教育機関・諸団体との連携

県教育委員会との連絡会（六月三十日）では、教育長、副教育長、教育次長、各課長との意見交換を行うことができた。

県PTA連合会との連絡会（七月十五日）では、いじめ・不登校の現状、週休日の部活動の在り方、PTA活動と教職員の参加状況などについて意見交換がなされた。

県教頭会との連絡会（九月六日）では、「教頭の業務改善に関する意見集約」の結果を基に情報交換がなされた。

県退職校長会との連絡会（九月二十九日）では、「ICT教育等の現状と課題」について協議がなされた。

教職員課との連絡会（十一月十六日）では、管理職の異動と任用、役職定年、後継者育成、教頭の業務改善について意見交換がなされた。

三 学校予算に関する要望活動

各地区校長会・県立学校からの要望を集約

した要望書を作成し、十一月一日、県教育委員会に対して学校予算に関する要望を行った。

教職員の配置改善の面では、小中学校における加配教員の確保、高等学校における新規採用者数の拡大等の要望を行い、また、特別支援学校においては学校の施設等を外部委託する費用の予算化等について要望した。

県教育委員会からは、令和六年度の国の概算要求等を注視しながら、必要な財源確保に努めること、児童生徒の推移等を踏まえながら、必要な教員の採用に努めていくことなどの回答があった。

四 その他の各種会合の開催

日本教育会全国教育大会は、昨年度、本県で開催された大会と同様に、オンライン方式を取り入れたハイブリッド形式で十一月十一日に北海道で開催された。（参加者四六〇人）

〔研究部〕

一 鹿児島県小・中学校長研究大会開催

（大会主題）

「あしたを拓き、心豊かでたくましく生きる人間の育成を目指す学校教育の創造」

本年度の研究大会は、コロナウイルス感染症への対応のため三年間、紙上開催であったが、四年ぶりに対面式の参加型での開催となった。

研究部では、令和二年度から研究大会の在り方について検討を重ねてきており、コロナ感染対応だけでなく、短期間でありながらも大会主題に沿った中身のある研究大会となるよう会場や時間設定を工夫した一日開催を実施した。

具体的には、移動に費やす時間を短縮するため、参加者は全体会開始時から、全体会場と分科会場に分散した上で、分科会場は、本会場とオンラインで結び、リモート視聴とした。午後からの分科会発表については、実践発表が学校経営力の向上に欠かせないという観点から、従前に実施された流れと同程度の時間を確保した。

昨年度来、予定していた津曲学園理事長の津曲貞利氏の講演においては、企業の経営者として、先行き不透明な時代に必要な資質・能力等について学校経営上、多くの示唆をいただいた等の声が聞けた。また、分科会においては、議論しながら学校経営を学ぶ機会を得られ、有意義な情報交換ができた。来年度の研究大会は十一月十五日（金）に開催予定である。

二 九州・全国の研究大会

令和五年度の九州・全国の研究大会は、対面を主とした開催であった。

- 九州地区小学校長協議会研究大会佐賀大会
田中小 谷口 善郎 校長(第二分科会)
西原台小 田中 雄志 校長(第三分科会)
八幡小 下古立 浩 校長(第七分科会)
- 全九中、全日中学校長会研究大会大分大会
発表なし
- 全国連合小学校長会研究協議会東京大会
発表なし

令和六年度は、九小協は沖縄県、全連小は徳島県、全九中は宮崎県、全日中は岩手県で開催の予定である。
末筆ではあるが、令和五年度の県内外の研究論文執筆・発表及び分科会運営に御協力いただいた校長先生方にお礼を申し上げます。

〈人事給与部〉

「令和五年三月の人事・給与に関する意見と令和六年度への要望」及び「教職員の人事評価制度に関する意見・要望」について、全校長にアンケート調査を実施し、その結果を基に、十一月一日の「県教育委員会への要望説明の会」において、次の点を主に要望した。

一 人事異動について

- (一) 校長が、より主体的に学校経営を推進できるよう、校長の具申を十分に尊重する。
- (二) 定年延長に伴う配置や役職定年の考え方、給与や処遇等について、全ての教職員が意欲をもって勤務できるよう検討する。
- (三) 業務改善に係る人的配置について、加配の増員など、今後より一層推進する。

二 給与について

- (一) 教職に魅力を感じられるよう教員の給与の維持・改善に努める。
- (二) 管理職の給与や手当等については、職責に見合う処遇の改善を図る。

三 人事評価制度について

評価者が、公正かつ客観性のある評価を行うため、事例研究を含めた研修を、県・地区がリードして実施する。

県教育委員会からは、各地区及び学校の課題を十分に配慮した上で適切に対応していくこと、新たな制度については丁寧に説明していくこと、業務改善の推進に必要な教職員定数や財源の確保に努めること、人事評価の研修は研修内容や方法の改善に努めていくとの回答を受けた。

〈広報部〉

令和五年度も会員の皆様の御協力により、当初の計画に基づいた活動が円滑に進められたことに感謝申し上げます。

一 月刊「鹿児島島の教育」

「随想」は、県下各地において様々な分野で活躍しておられる方々に玉稿をいただくことができた。教育職以外のお考えや思いに触れ、人間としての幅を広げることができた。また、会員の提言や実践事例、各種話題等はそれぞれ特色があり、学校経営に生かすとともに、職員・児童生徒への話題としても活用することができた。

二 特集号「鹿児島島の教育」第六十九号

特別寄稿として、かごしまキャックス代表 野元尚巳氏には、冒険の奥深さを、九州タブチ 代表取締役社長鶴ヶ野未央氏には、企業における信念に基づいた経営の奥義を御示唆いただいた。その他、多くの会員の先生方の玉稿を掲載できた。

三 「師の道」五十一号

先輩校長の歩いてこられた教職への熱い思いに感動し、敬意を表するとともに、少しでも近づけるよう決意を新たにしました。次号に関して、今年度から実施される定年引上げ・役職（校長職）定年に対応するため、校長職のうちに原稿作成し、提出を終えるサイクルに見直すことを決定し、周知しました。

四 「講演録」発行

十二月十日（日）に実施された本県出身の声優・ナレーター桑木栄美里氏の講演を講演録として、発行することができた。

編集後記



二月を迎え、令和五年度も残りわずかとなりました。各学校におかれましては、年度末年度始めの業務に取り組まれていることと思います。私も、今までの「鹿児島島の教育」や中央教育審議会答申を読み返し、来年度の学校経営等について思考中ですが、「心理的安全性」というキーワードを見つけました。答申には「心理的安全性」の確保は、様々な課題に対応できる質の高い教職員集団を形成するために不可欠である。働き方改革を通じて学校全体が抱える業務量を見直し、安全・安心な勤務環境を実現するのみならず、萎縮せずに意見を述べたり、前例や実績のない試みに挑戦する教師を支援できる環境を醸成したりすることで、学校内外で発生した問題を教職員が一人で抱え込むことなく、組織としてより最適な解を導き出すことが可能になる。」とあります。経験年数等に関係なく、思ったことが言える組織になっているだろうか。例がないことが理由に教職員の挑戦を拒んでいないだろうか。子供のために言いながら、学校の体裁や自分の立場を優先させていないだろうか。リフレクシオンし、令和六年度に臨みたいと思っています。

最後に、今年度の「鹿児島島の教育」も、皆様の御協力により本号をもちまして、当初の計画どおり発行を終えることができました。業務多端な中、玉稿をお寄せいただきました皆様方に心から感謝するとともに、一年間各地区で広報部員として御尽力いただいた皆様にお礼申し上げます。

山里浩美（花尾小学校）

【お詫び】

本刊一月号三ページ「提言」に誤植がありました。お詫びして訂正します。

発達指示的生徒指導 ↓ 発達支持的生徒指導